兵庫県立歴史博物館・東京大学史料編纂所合同記者発表

豊臣秀吉の自筆書状を発見

―秀吉から茶々（淀殿）へ「さすかおひろい御ふくろとミへ申候」―

１．発表のポイント

・豊臣秀吉自筆書状の新発見。しかも淀殿（茶々）あて。
・これまで秀吉の「自筆」文書は 100 点以上の規模で知られているが、
そのうち淀殿宛の自筆書状は 5 点、うち「茶々」あては 3 点に過ぎない。しかも秀吉の性格を窺うことのできる、極めて興味深い内容を持つ書状である。
・この書状は、兵庫県立歴史博物館特別展「ひょうごと秀吉」（会期：平成 29 年 10 月 7 日〔土〕～11 月 26 日〔日〕、神戸新聞社と共催予定）で展示する予定。

２．発表の内容

〔経緯〕平成 28 年（2016）6 月 23 日（木）、東京大学史料編纂所一般共同研究「兵庫県下所在豊臣秀吉文書の調査・研究」（研究代表者：当館学芸員前田徹）の調査として、豊岡市教育委員会のご協力をいただき、同市出石町内の個人宅において同家所蔵資料を調査したところ、多くの中世・近世史料の中から、妻の一人である茶々（＝淀殿）へ宛てた秀吉自筆の書状（＝手紙）が見いだされました。その後、解読および内容の分析を進めた結果、これまで学界未周知の新出史料であると判断できましたので、発表します。

〔内容〕秀吉が、当時病をわずらっていた茶々に宛てたものです。茶々が嫌いだと言っていたお灸を我慢して据えたことを「まんそく申ハかりなく候（＝大いに満足です）」と褒めるとともに、食事をしっかりとるように、また「さいり（＝サンマ）」を送るので賞味してほしい、と伝えています。追書（＝追伸）部分には「さすかおひろい（拾）御ふくろとミへ申候（＝さすがはお拾のお母さんだ）」と賞賛の言葉が添えられており、秀吉の茶々への優しい心遣いがほほえましく感じられます。なお、この「おひろい御ふくろ」という文言から、この文書は、豊臣秀頼（幼名が拾）が生まれた文禄 2 年（1593）8 月以降で、拾が秀頼と改名する文禄 5 年（1596）閏 7 月ごろ以前のものであることがわかります。また、全文秀吉自筆文書に共通する独特の筆跡で書かれており、全て秀吉自筆と判断できます。

なお、本書状の年代比定については、後掲する藪田コメントもご参照ください。

〔意義〕秀吉自筆の文書は 100 点程度の存在が知られており、必ずしも少ないわけではありませんが、新たなものが見つかることは珍しく、この点で意義があります。また、宛先が淀殿のものに限ればこれまで知られていたものは 5 点、そのうち「茶々」宛は 3 点（ただし茶々宛 1 点には正本と別に写しもある）と非常に少なく、この点からも貴重といえます。内容も秀吉の私生活やこまやかな（＝細かい）性格、茶々への愛情を考える上でも絶好の素材となる書状です。

なお、この書状は、兵庫県立歴史博物館特別展「ひょうごと秀吉」（会期：平成 29 年 10 月 7 日〔土〕～11 月 26 日〔日〕、神戸新聞社と共催予定）で展示する予定です。

３．問い合わせ先：兵庫県立歴史博物館　学芸課　主査・学芸員　前田　徹
〒670-0012　兵庫県姫路市本町 68 番地　電話：079-288-9011、FAX：079-288-9013

コメント

（1）村井　祐樹（東京大学史料編纂所准教授）

最近の発見で、秀吉の性格は『細かい』『しつこい』ものだったことが明らかになったが、今回の文書には、一方で、（同じ性質の表と裏であるが）こまやかな気配りのできるマメな性格であったことが示されている。秀吉の私生活や茶々への愛情を読み解くことのできる、絶好の書状である。

また、茶々が灸を使っていたこともわかり、医学史的にも興味深い。

（2）藪田　貫（兵庫県立歴史博物館　館長）

歴史家として「太閤の人間性と生涯の事績の真相を究める」には、「太閤秀吉の手紙を一通でも余計に読むほかない」と考え、また「太閤の手紙は、読めば読むほど面白くて、やめられない」魅力に惹かれて桑田忠親（一九〇二～一九八七）は、職場である東京大学史料編纂所で一八年間、「殆ど毎日のように太閤の手紙をいじくって暮らした」。その成果は、『太閤の手紙』（昭和三四年〔一九五九〕）として公表されているが、そこには正室・北の政所おね、大政所のほか、側室のちゃちゃ・松の丸など宛、あるいは侍女宛の手紙が多数、収録され、秀吉が近しい女性に宛てた書簡を通覧することができる。

「秀吉の自筆を集めてみると、北の政所にやったものが、ずば抜けて多い。やはり、秀吉は、生涯を通じて、この糟糠の妻を重んじていたのであろう。」というのが、桑田の指摘する大きな特徴であるが、茶々に関して言えば、つぎの五通が収録されている。

おちゃちゃ宛１（天正一八年〔一五九〇〕九月）　てんか　「若君（鶴松）」（天正十七年五月二十七日生）

おちゃちゃ宛２（文禄二年〔一五九三〕一一月カ）二五日　伏見より大かう　「ひろいに乳をよくのませ」

おちゃちゃ宛３（文禄二年暮か三年春か）三日　「そもじの乳足り候はずば」

おかかさま宛４（文禄三年春か）月日欠　「ここもと普請」「灸めされ」

御ふくろさま宛５（慶長二年〔一五九七〕）一二月八日　大かう　「秀頼についで御なつかしく」

＊通常、手紙は年を書かず、月日や日にちで済ますが、時に日付すらない場合もある。したがって上記の年次の推定はすべて、桑田の考証にもとづく。

上記の内、今回の新発見文書との強い繋がりを感じさせるのは、つぎの書状である。

返すぐ、灸點、誰なりとも、めされ候べく候。御ひろいさまへは、やいと御無用にて候。かかさまめされ候はゞ、くせごとにて候。以上。

見事の御音信おくり給はり候。一しほくながめいりまいらせ候。こゝもとの普請申しつけ候て、五三日中に参り、つもる御物がたり申すべく候。又、この花入一しゆ進上候。やがてく参り候はん折節、いろくのみやげ進じ申すべく候。かしく。

おかゝさまへ

おひろい（のち秀頼）出産（文禄二年八月三日）後、乳の出を心配した手紙に続き、この書状では茶々に灸を据えることを命じているが、新出書状では、その灸に励んでいることを秀吉は満足と伝えている。いまひとつ「能を見せたい」という点では、文禄三年推定のおね宛書状（月日欠）で、「能に暇なく」「そなたにても能をいたし候て、見せ申すべく候」と記しているのが参考になる。本配布資料本文では、本書状の年代を文禄二年（一五九三）八月から文禄五年（一五九六）閏七月ごろとしているが、ここで述べた両者を考慮すると、本書状は文禄三年（一五九四）のもの（秀吉五八歳、おひろい二歳、茶々二六歳）の可能性が高いと考えられる。

なお、秀吉の自筆書状は「仮名書きにした自筆書状」（桑田）に特徴があるが、秀吉みずから「折紙仮名に書き候て越し候べく候」（〔天正一三年・一五八五〕一〇月二四日付、北の政所侍女宛）と記している。

じつはこれは、女性が書き手となった場合―女筆という―の約束事で、女筆には、①仮名書き、②散らし書き、③書き止め文言「かしく」、④「参らせ候」、⑤「そもじ」などの女房言葉の使用が特徴とされる。

秀吉の場合、散らし書きの例は少ないようであるが、それ以外については、ほぼ妥当する。その意味で、女筆の慣習に則った書状であると言えるが、その大きな理由は、おね（北の政所）ら身近な女性との間で、往復書簡が交わされたことにあるが、いまひとつは、尾張の足軽出身の秀吉のリテラシーから見て、仮名書きの手紙が、彼にとってもっとも得意な方法であった可能性がある。

いずれにしても本書状も、「仮名書きにした自筆書状」という特徴を見事に備えている。

秀吉自筆書簡　桑田忠親『太閤の手紙』昭和34年、文芸春秋新社

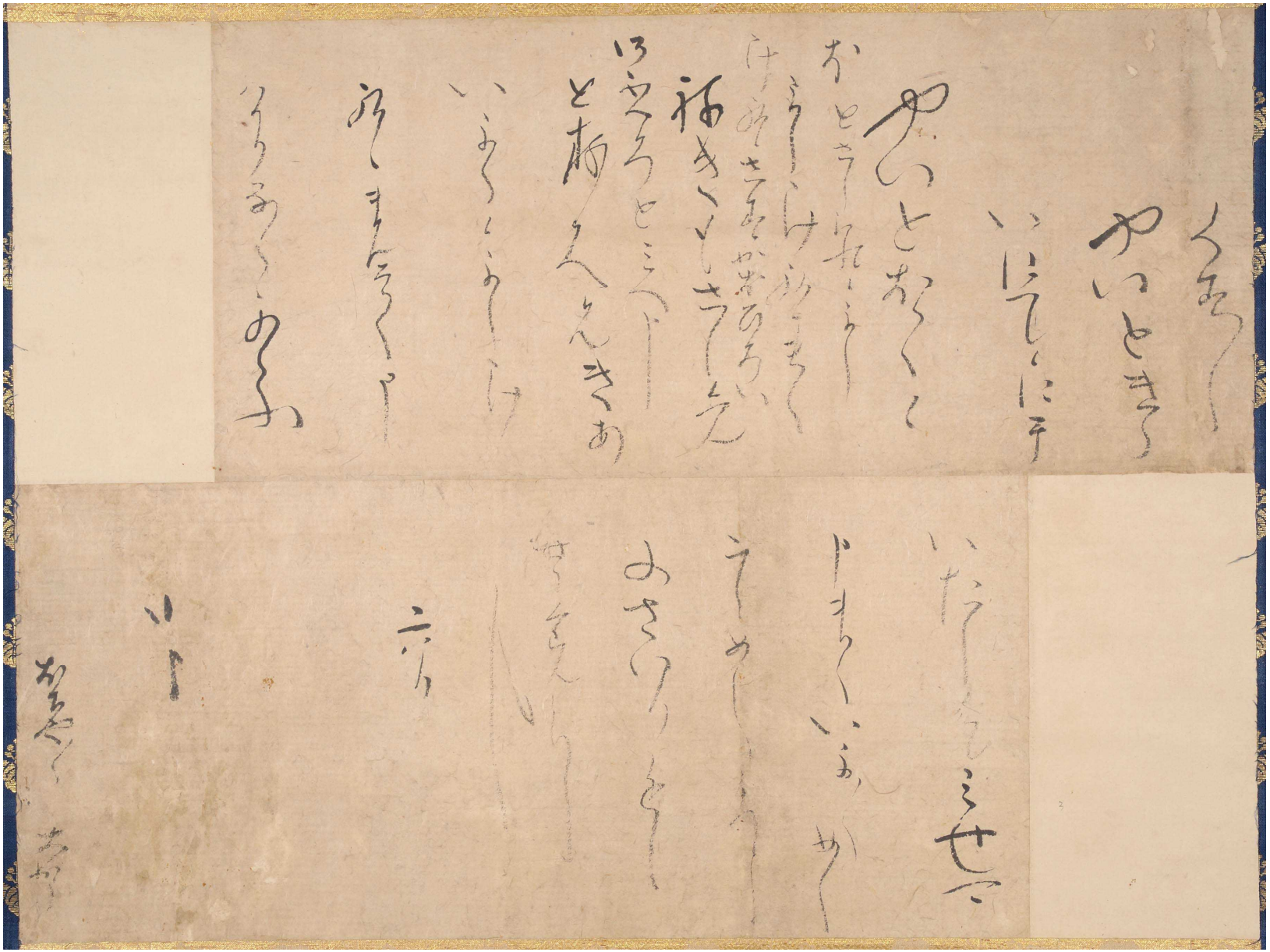
こほ（おねの侍女か）　天正2年　12月22日　藤きちろうひで吉
　長浜城主となった秀吉の領内統治について語る　秀吉38歳　おね27歳
　正妻に与えた手紙として最古　29頁
　　＊おね宛　信長教訓状　「ただしおんなの役にて候」31頁
大御乳の人さま（信長乳母養徳院）　天正8年5月24日　ひめじより　ちくぜん秀吉
五もじさま　月日欠　陣中よりおとと
　播磨在陣中よりの書簡　42～43頁
大御乳の人さま（信長乳母養徳院）　天正12年3月23日　ちくぜん秀吉
　池田恒興の生母　尾張小牧の戦い　86-87頁
こほ（おねの侍女か）　天正13年閏8月7日　とやまよりひで吉
　25・29日の来信への返信　101頁
中なごん（北政所の侍女）　天正13年10月24日　てんか（13年7月関白）
　「折紙仮名にて書き候で、越し候べく候」106頁
いわ（北政所の侍女）　天正16年10月5日　てん
　「わざと申しまいらせそうろう」茨木→聚楽第　143頁
五さ（北政所の侍女）　天正18年4月13日　てんか
　小田原陣中から聚楽第への返信　「若君恋しく」「我等も灸点致し」「天下おだやかに」
　155頁　「そもじより」「淀の者よび」淀殿を小田原に寄越せ
大まんところの殿さま　5月1日　てんか
　大政所宛初の手紙　語句が北の政所宛よりも丁寧　157頁
おちゃちゃ宛1　天正18年9月1日　てんか　　「若君（鶴松）」（17年5月27日淀生）
　側室淀殿に宛てた最初の手紙　173頁
御つるまつさま　天正19年春ごろ　てんか　174頁
宰相宛（大政所侍女）　文禄元年5月6日　大かう
　生母への最後の手紙　名護屋から「唐を取り候て、そもじさまの迎ひ」185頁
おね宛　文禄元年5月6日　なごやより大かう
　節句の帷子のお礼　「九月の節句は唐にて」「そもじの迎ひ」「大坂の火の用心」187頁
おね宛返事　文禄元年12月20日　大かう　「ちやのゆにて、うちくらし候」194頁
ね宛　文禄2年3月5日　大かう　能10番を列記　（正月57歳の春から能の稽古）
ねもじ宛　月日欠　大かう　能小袖の受け取り礼状「そもじは子持ち申さず」204頁
おね宛　文禄2年5月22日大かう「大明国よりわびごと」「二の丸どの懐妊みもち」208
おね宛　8月3日　大かう　「やがて凱陣」「ゆるゆるだきやい候て物がたり」211頁
おね宛（文禄2）8月9日　大かう　「子の名はひろいと申し」8月3日生まれ　212頁

8月25日に帰阪し愛児に会う
おちゃちゃ宛2（11月カ）25日　伏見より大かう　「ひろいに乳をよくのませ」　214頁
おちゃちゃ宛3　（2年暮か3年春か）3日　「そもじの乳足り候はずば」215頁
おかかさま宛4　（文禄3年春）月日欠　「ここもと普請」「灸めされ」216頁
ともじ宛（側室）　3月18日　伏見より　大　「うつくしく候能着」221頁
おね宛　月日欠　大かう　「**能にひまなく候**」「**そなたにても能**をいたし」224頁
西の丸五もじ（側室松の丸、京極氏の女）宛　大かう22日「湯に入り灸点などして」
「駒井日記」に拠れば4月22日～25日　太閤と松の丸殿の有馬入湯　229頁
御ひろいさま宛（文禄4年、3歳）正月2日
大さかより大かう返信「口を吸い申すべく」246頁
（おひろいさま宛）　5月5日　返信「おかかさまへ言づて」247頁
御ひろいさま宛　7日　とと　返信　248頁　「土産に面子、唐までにたづねて」
おひろいさま宛　17日　とと　「御残り多く思ひまいらせ候」　250頁
秀さま宛　（慶長2年、5歳）5月3日　伏見より大かうとと　「口を取り」260頁
秀よりさま宛　12月2日　とと　「口を吸い」261頁
御ふくろさま宛5　12月28日　大かう　「秀頼についで御なつかしく」262頁
中なごん様　（慶長3年5月、6歳）20日　「**かかさま**に御申し候て」

「秀吉の自筆を集めてみると、北の政所にやったものが、ずば抜けて多い。やはり、秀吉は、生涯を通じて、この糟糠の妻を重んじていたのであろう。」106頁
「仮名書きにした自筆の手紙」

豊臣秀吉自筆書状　個人蔵、写真提供：東京大学史料編纂所

文書の寸法（タテ×ヨコ、cm）　上段：二二．六×五〇．八、下段：二二．五×四九．七



※この写真については、本件報道以外の目的での無断利用はご遠慮ください。

豊臣秀吉自筆書状　個人蔵

【翻刻】（読点を補っている）

かへすく
やいときら
いにて候に、其
やいとおゝく候（炎）
ほとさしられ候よし（ママ）
よしうけ給候まゝ、
うけ給候、さすかおひろい
ねきもさし候ハん（熱気）
御ふくろとミへ申候、
と存候へは、きあ
いよく候よしうけ
給候、まんそく申
ハかりなく候、のふ（能）」

いたし候て、ミせ可
申まゝ、いよくめし（飯）
こしめし候へく候、
又さいり進候、
せうくわん（賞）（瓶）候へく候、
かしく、
六日
（墨引）
おちやく　大かう

かしく、
六日
（墨引）
お茶々　大（太）閤

【読み下し文】

返すがえす
やいと（灸）嫌
いにて候に、それ
程差しられ候よし
承り候、さすがお拾
おふくろと見え申し候、
やいと（灸）多く候
よし承り候まま、
熱気も差し候わん
と存じそうらえば、気
合い良く候よし承
り候、満足申す
ばかりなく候、能
致しそうろうて、見せ
申すべきまま、いよいよ飯
こしめし候べく候、
又、さいりまいらせ候、
賞翫候べく候、

【現代語訳】

灸をたくさんすえたということを聞いていたので、熱が上がるのだろうと心配していたところ、具合が良くなったと聞きました。

たいへんに満足です。能を企画して（茶々に）見せたいと思っているので、これから食事をしっかり取るように。

また、さんまを送ったので、味わうように。

かしく。

六日

お茶々へ　　太閤より

追伸

灸が嫌いなはずなのに、それほど（灸をしなければならない程）高熱だったと聞きました。（それを耐えたのは）さすがお拾いのお母さんだね！